

農村計画部門 一研究協議会

減災思考と実践 —豪雨被災を乗り越える集住のレジリエンス

〔資料あり〕

9月14日（木）9:00～12:30 法経済学部本館 第7教室

司会 後藤隆太郎（佐賀大学）

副司会 鈴木孝男（新潟食料農業大学）

記録 田中暁子（後藤・安田記念東京都市研究所）

1.主旨説明 菊池義浩（仙台高等専門学校）

2.主題解説

①水系散居の免浸と山川里つながり復旧 飯豊町2022豪雨災害

糸長浩司（エコロジー・アーキスケープ）

②山であそび、集落をまもる 平成26年8月豪雨

澤田雅浩（兵庫県立大学）

③宿泊施設を利用した避難 平成23年紀伊半島大水害

本塚智貴（明石工業高等専門学校）

④つながりを育む避難機能付き共同住宅 平成30年7月豪雨の教訓

磯打千雅子（香川大学）

3.コメント 岡田知子（西日本工業大学名誉教授）

斎尾直子（東京工業大学）

4.討論

5.まとめ 神吉紀世子（京都大学）

自然災害の大規模化・多発化が指摘され、減災の考え方が遍在化してきた現代において、どのように持続的な集住空間を展望できるであろうか。この問題に建築系農村計画の観点からアプローチすることが、本研究協議会で設定した課題である。

集住空間の原型といえる「集落」は、生活を取り巻く環境に人間が働きかけることで形成されており、災害へ備えるかたち（ハード）や仕組み（ソフト）に、地域の文脈および当時の社会背景を反映した多様な知恵が組み込まれている。それは、持続可能な集住空間をデザインする要素であり、地域に設えるための技法と捉えられる。

特に最近では、西日本を中心に広域的な被害を出した平成30年7月豪雨（西日本豪雨）、東日本の広い範囲で記録的な大雨となった令和元年東日本台風など連続して豪雨災害が発生している。水害が発生しやすい国土条件である我が国では、大雨や洪水を上手くいなしな

がら条件の良い土地に住み続けるため、災害を軽減する合理的な生活空間を構成してきた。改めて「水」との関わりに焦点を当て、そこでの暮らしを再構築していく現代的な手立てが求められている。

主題解説では、近年発生した水害を取り上げ、被災から復興の現状について報告いただく。現地での取組みから得られる知見を受け、討論では被災経験が集落のレジリエンス形成につながるサイクルを意識しつつ、地域に息づく減災の知恵を再考し、その視座から現代における集住空間の計画課題へと議論を展開したい。また、都市部を含む圏域的な関係性によって構成され、災害時には互いに補い合うことで破綻するのを防ぎ、正常な状態に復元していくような、減災機能を有する地域システムの可能性について検討する。